

研究報告

地域資源としての札幌軟石に関する考察

—札幌市における建物の分布をとおして—

杉浦 正人¹⁾ 水野信太郎²⁾

1) 北翔大学北方圏学術情報センター研究員 2) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

抄 録

「札幌軟石」を札幌の地域資源として仮説的に位置づけ、「こんにち的」に考証することを目的とした。札幌の市民グループが2005年から続けてきた札幌軟石の建造物に関する調査を基礎資料として、特に対象を建物に絞り、定量的・定性的考察を試みた。

その結果、2005年から2015年の間に、築50年以上の軟石建物が約320棟、札幌市内に存在することが判った。一方、そのうちの約40棟が、この10年間に解体され、消失した。建物の分布状況も明らかとなり、軟石をとおして札幌の地誌の一面を浮き彫りにすることができた。豊平川の複数の支流の、しかも多くの箇所軟石が採掘されていたことも判った。建物が多種多様に再利用されている様子も窺われた。

キーワード：札幌軟石、地域資源、建物、分布状況、再利用、地誌

I. はじめに

本研究では、「札幌軟石」という地域資源に着目する。札幌軟石（地質学的には「支笏溶結凝灰岩」という）は、明治初期から札幌で採掘が始まり、札幌を中心として道内で建築物等の石材として活用されてきた。耐火に優れ、断熱効果が高いといった特性から、積雪寒冷の風土に適した建材であり、公共建築や商家の蔵、農業用の倉庫、サイロなど多岐にわたって広く使われた。

ところで、筆者は「地域資源」という言葉を、「地域の持続的発展を生み出し、住民の豊かな生活に役立ちうる、その地域に特有な諸々の財・産物」と理解する^{①)}。札幌軟石は、北海道とりわけ札幌及びその近郊における人々の生活や産業に役割を果たし、都市・農村の景観を特徴づける資源として歴史を重ねてきた。筆者はその意味で札幌軟石を、地域的な文化・自然遺産であり、地域資源の一つであると、仮説的にまず位置づけたい。

「仮説的に」とあえて述べるのは、札幌軟石が実際にどのように・どれくらい建造物で使われてきたか、全面的に公知されているわけではないからである。石造の建物が市内に点在していることは知られているが、数は変動しており^{②)}、例えばこんにち、どの地域に・どれくらい・どのように遺っているかとなると、必ずしも定か

ではない。

本稿では、「地域資源としての札幌軟石」という位置づけを「こんにち的」に考証することを目的とする。「こんにち的」とは、先行諸研究の見地を少しでも深めつつ、もっとも新しい時点における札幌軟石の意義を明らかにするという意味を込めている。

II. 研究の方法

筆者も一員として所属している「札幌建築鑑賞会」^{③)}では、「札幌軟石文化を語る会」^{④)}の協力を得て、2005年から「札幌軟石発掘大作戦」と称する調査活動を10年間にわたって展開した。これは、札幌軟石を用いた建造物について、札幌市域を有志会員が手分けして現地踏査したものである。ゼンリン住宅地図のページごとに分担し、各々割り当ての一带を歩いて調べた。市内全域を悉皆的に網羅することはできなかったが、会員から情報を募るなどして、探し出した。

実際に調査対象としたのは、建物に限らず、塀や門柱などの工作物（縁石、敷石、煙突、灯籠、神社の鳥居、狛犬など）も、軟石製とみられるものはすべて含めた。しかし、本稿では建物に絞って考察することとする。いうまでもなく建物は景観上に占める重要性が高いのみならず、その使われ方は人々の暮らしや生業に深く結びつ

いている。そこでまず建物を取り上げることとしたものである。以下、本稿で「建物」というときは、断りのない限り札幌軟石を用いた建築物を指すものとする。「大作戦」の調査結果を基礎資料として、建物の用途、使われ方などを統計的に整理し、分布の状況を地理的に明らかにするとともに、そこから何が読み取れるか分析した。定量的な考察に加え、個別事例も可能な限り紹介し、定性的な検討の素材とした。

一口に軟石の建物といっても、いわゆる「純石造」もあれば「木骨石造」、鉄筋コンクリート（RC）造や煉瓦造との「混構造」など、構造的にはさまざまである。また、建物全体に用いているものもあれば、2階建ての1階部分のみとか、本体は木造で腰壁に貼っているもの、基礎・土台にのみ用いているものなどがある。本稿では、建物の1階部分以上に使われているものを対象とした。1階部分以上とはいっても、RC造のビルの低層階の外壁に軟石を貼ったものは別とした。正面が軟石以外の材で「サイディング」されていて、一見木造などのように見えるものでも、側壁等で使われていれば含めた。ただし、明らかに「袖壁」のみというものは除外した。

建築年代もさまざまだが、おおむね「築後50年以上経過」を目安として対象とした。いわゆる歴史的景観資産や地域資産の価値を評価する基準の一つが「築50年以上」とされるからである²⁵⁾。築年数の判断は、一部は所有者等への聞き取りに依ったが、建物外観目視も拠り所にした。その目安についてはⅢ. 4. 「南部（南区）」で詳述する。前述の「RC造のビルの低層階の外壁に軟石を貼ったもの」は建築年数が10～20年と新しいので、「新築」として別にしたが、古い建物等の元の石材を用いている場合は例外的に「再生新築」として、「築50年以上」に含めた。

Ⅲ. 札幌市内の軟石建物の分布状況

札幌の市域（政令指定都市としての10区）を五つの地域に分けて、建物の分布を考察したい。すなわち、中心部（中央区）、北部（北区・東区）、南東部（白石区・厚別区・豊平区・清田区）、南部（南区）、西部（西区・手稲区）である。

存在を確認した建物について、元の用途を「蔵・倉庫」²⁶⁾「店舗・事業所」²⁷⁾「住宅」²⁷⁾「サイロ」²⁷⁾「その他」に分類した。また、業種を「農業」²⁸⁾「商業」²⁸⁾「製造業」²⁹⁾「流通業」¹⁰⁾「個人」「宗教」「公共」と分けた。タマネギ農家の納屋は、用途「蔵・倉庫」、業種「農業」といった具合である。用途や業種の分類に当たっては、外観目視のほか、建物の所有者・使用者への聞き取り、ゼンリン住宅地図等の古い版などを参考にした。

元の用途から転じて別の使われ方をしているものを、「再利用」として抽出した。蔵や倉庫が飲食店に使われているものなどである。農業系の倉庫が商業系の資材庫に転用されているような場合は「倉庫」という用途が変わったわけではないので、再利用には含めない。

1. 中心部（中央区）

2005年に調べ、その後2014～15年に補充調査をした結果、中央区で70棟の建物を確認した。元の用途は、「蔵・倉庫」が51棟、「店舗・事業所」が12棟、「住宅」が2棟、「その他」が5棟である。業種別にみると、「商業」25棟、「個人」16棟、「製造業」8棟が多い。中央区の地域的な特徴としては、商家・質屋の蔵が目立つこと、教会などの宗教施設で使われていることが挙げられる。また、公共建築に用いられているのは現在「札幌市資料館」（旧札幌控訴院）1棟のみである。かつては札幌郵便局など大きな建物で見られたが、筆者らの調査のはるか以前に解体された。

70棟のうち、この10年間で21棟の建物解体を見た。3割が消失したことになる。一方、解体された建物の元の石材を利用して新築した「再生新築」が、3棟ある（再生新築のうち2棟は、元の建物が2005年以降に解体されたものだが、再生されたことに敬意を表し、解体の21棟には含めない）。

これ以外に、新たなRC造のビルの外壁などに軟石を用いている「新築」の例が7件、見られる（新築7件の数は、70棟には含めていない）。「新築」はいずれも商業的な施設である。7件以外にも、内装材に用いた例も含めれば数はもっと多くなるだろう。

70棟の中で、「再利用」が17件あった。1/4弱の割合である。建物の雰囲気を活かした飲食店や販売店、ギャラリーなどである。中央区のなかんづく中心部は商業的な地域という性格からか、再利用が比較的早い時期から見られる。反面、土地の高度利用が進んでいる地域でもあり、古くからの小規模な建物が生き残るのに順風とは言い難い（解体された21棟の中には再利用されていた建物が3棟含まれている）。特に、創成川の東側のかつての工業地帯においては、建物の解体と再利用の双方が目立っている。再開発による超高層マンション等の出現は、建物解体に拍車をかける側面（いわゆる開発圧力）と住民人口増による再利用建物への需要増という側面を併せ持っている。

建物の分布を図1に示した。創成川の東側から大通以南、ススキノ、中島公園周辺にかけて多く分布している。創成川の東側は商業・流通業の倉庫が多く、大通以南からススキノは商家や質屋の蔵が目につく。石山通沿いにも個人の蔵などがみられるのは、この通りが文字ど

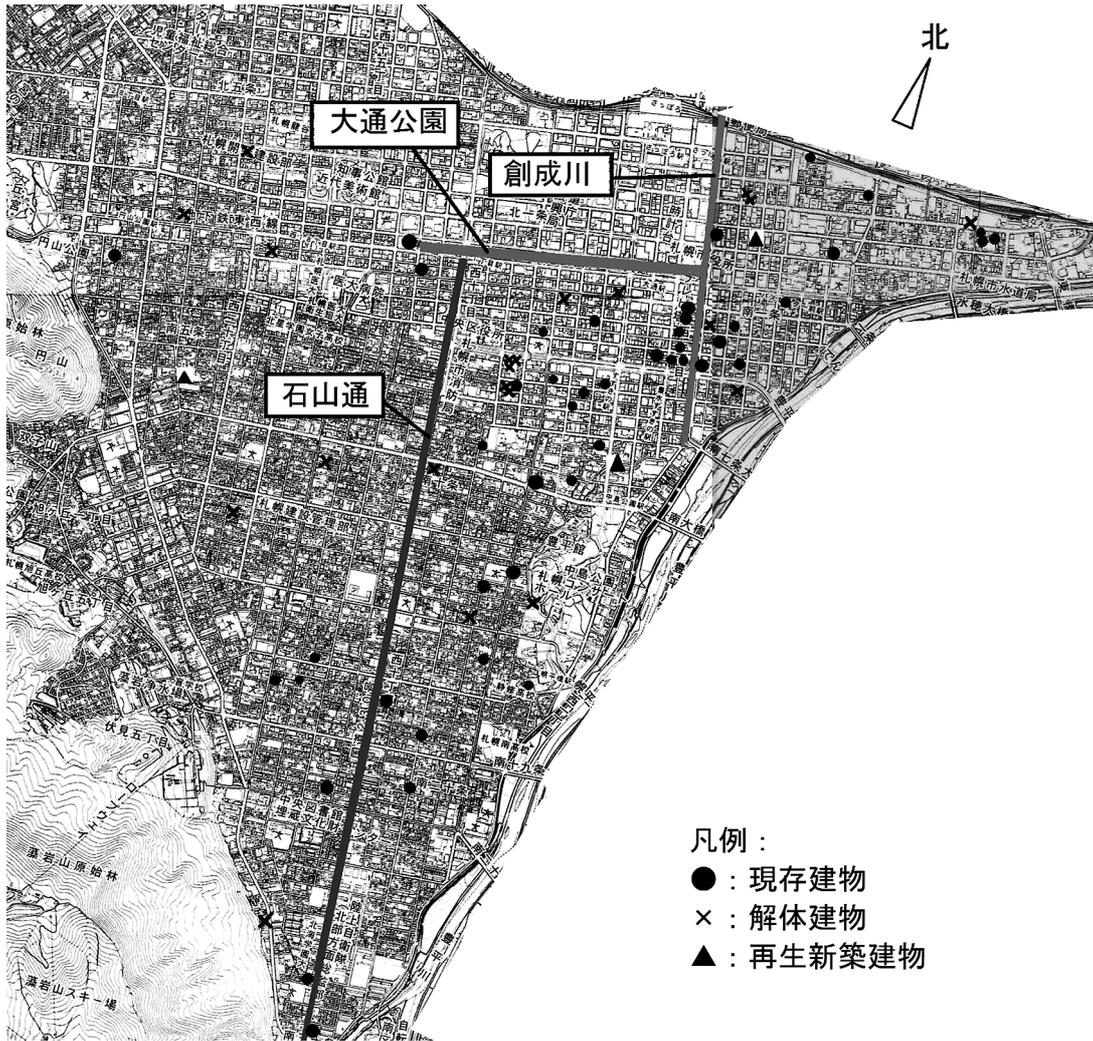


図1：軟石建物分布図 中心部（中央区）

おり「石山」から通じていることの記憶といえるかもしれない。明治時代、穴の沢（現在の南区石山）で産出された軟石を馬車鉄道で運んだことに由来する通りである。

個別事例① レストラン のや（中央区北2条東11丁目）写真1

かつての質蔵（伝昭和初期築）と酒蔵（伝大正期築）を再利用したレストランである^{注11)}。店主のK氏は、元々この近くで1980年代から倉庫の建物を再利用してレストランを営んでいた。札幌における建物再利用の先駆けの一人である。1992（平成4）年、その倉庫が解体されることとなったため、東区の元タマネギ倉庫に移転した。その後、1998（平成10）年に再びこの地でまた建物を借りることができた。K氏による長い年月をかけた建物所有者への働きかけが実ったものである。



写真1：レストラン のや

個別事例② 札幌まち家勇崎（中央区北1条東2丁目）写真2

1931（昭和6）年に青果問屋「勇崎恒次郎商店」の倉庫として建てられた^{注12)}。かつてここには地下の「室」



写真2：さっぽろ町家勇崎

(ムロ)もあり、輸入バナナが貯蔵され、熟成された。その後貸倉庫に転用された後、2000年からレストランとして再利用された。2013年にいったん解体されたが、2015年、耐震補強をして復元された。現在、北海道教育大学のイベントスペースとして使われている。かつての建物に使われた札幌軟石を再び用い（再生新築）、正面外観は往時と寸分違わず蘇った。店の印「十〇」と屋号も元どおりである。所有者・設計者・石材業者の「心と技」のたまものといえよう。

個別事例③ サンマルクの稲荷（中央区南16条西5丁目）写真3

中島公園と鴨々川にほど近いレストランの駐車場にある。この地で生まれ育ったWさんによると、昭和20年代の後半に伏見稲荷の分祠を祀ったものである。Wさんは中心部で老舗手芸店を営んでいて、商売繁盛を祈願してのことだそう。筆者らはこの分祠に‘土地の記憶’を読んでいる。この場所は少し窪んでいて、古地図を見ると鴨々川の支流が流れていた。昭和30年代のW

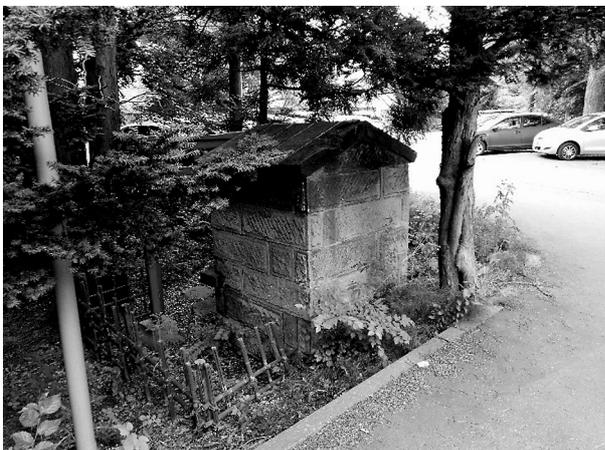


写真3：サンマルクの稲荷

さん宅の写真には、支流を生かしたとみられる池泉庭園が写っている。札幌市の「洪水ハザードマップ」によると、この祠の場所は洪水時の浸水区域に色分けされている。平坦な土地が多い札幌の中心部だが、軟石の祠が自然の微地形を教えてくれる。筆者はこの分祠を、レストランにちなんで「サンマルクの稲荷」と呼んでいる。

2. 北部（北区・東区）

2006年に東区、2008年に北区を調べ、2013～15年に補充調査をした。北区では22棟、東区では58棟を確認した。両区を合わせた80棟（うち1棟は2011年に解体）の元用途の内訳は、「蔵・倉庫」が68棟、「サイロ」が8棟、「住宅」が2棟、「その他」が2棟である。業種別には、「農業」が最も多く35棟、次いで「流通業」13棟、「商業」6棟、「個人」6棟と続く。この地域の特徴は、農業系の倉庫が多いことである。その大半はタマネギを収蔵した倉庫や納屋、馬小屋である。次の3.「南東部」の項で述べるが、サイロが市街地に点在していることも特筆すべき景観である。

建物の分布は図2のとおりである。図中、「道道花畔札幌線」に沿って建物が多く分布している。この道は幕末以来の古道で、「元村街道」とも呼ばれた。往古、豊平川の本流だった「フシコ・サッポロ川」がこの道に並行して流れていた（河道は直線化されているが、今も札幌新道以北で「伏籠川」として流れている。新道以南は暗渠化され、一部「パープルロード」という散策路になっている）。

川がはぐくんだ肥沃な大地によって、この一帯は明治以降全国有数のタマネギ産地となった¹³⁾。収穫したタマネギは街道を馬車で運び、札幌駅や苗穂駅近くの大きな倉庫に収蔵された。くだんの街道は「タマネギ街道」でもあった¹⁾。

おおまかにみて、川の中流から下流（北）にかけては生産農家のタマネギ倉庫、中流から上流（南）は流通業者（仲買商人）の倉庫だったものが多い。生産農家の倉庫の多くは1960年代に建てられている。つまり、農家が収穫したタマネギを自前で保管するようになった多くはその頃からで、それまでは仲買商人の倉庫へ運んでいた。タマネギは商品作物で価格が変動するため、商人が安い値で買って、値動きを見ながら有利に市場に流通させていたのである。その分、農家は不利益を被っていた。自ら倉庫を建てて保管するようになったのは、その不利益を解消するためである。協同組合を結成し、販路を開拓しつつ、市場価格にも通じるようになった¹⁴⁾。タマネギ倉庫は、生産農家の経済的自立のシンボルともいえよう。

筆者らが調査を始めた時点ではすでに姿を消していた

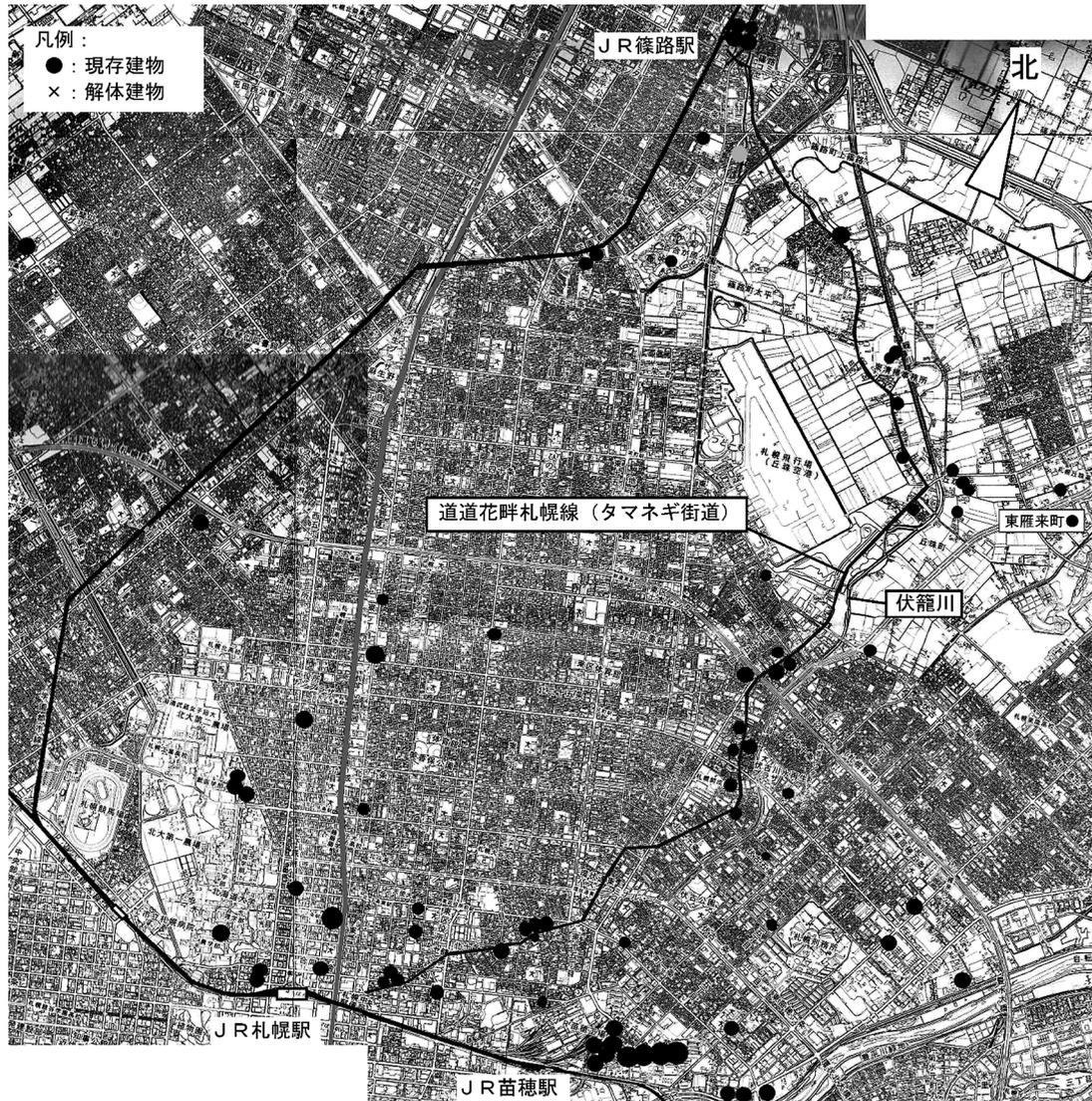


図2：軟石建物分布図 北部（北区・東区）

が、かつては札幌駅周辺にも大きな倉庫が建ち並んでいた。これらも多くは農業系の流通業倉庫である。札幌駅界隈はこんにち、街並みが大きく変わっているが、苗穂駅近くには駅南の中央区側も含め、今も倉庫が集積している。また、篠路駅前も煉瓦造の倉庫群の多くが消失したが、軟石の倉庫が3棟残っている（農協の倉庫でも1棟あったが、2011年に解体された）。札幌で軟石の‘駅前倉庫群’を見ることができるのは今や苗穂と篠路だけになった^{註15)}。なお、苗穂駅北側の倉庫群のうちの4棟は旧陸軍の糧秣廠で、軍馬の飼料となる燕麦を収蔵していたものである。

北部地域で特徴的なもう一つは、これらの建物の多くが多彩に再利用されていることである。現存79棟のうち、再利用されているのは19棟に及び、数としては中心部（中央区）よりも多い。しかも、中心市街地から住宅地、郊外へと波及している。のみならず、再利用の業態

が実に多岐にわたっている。中心部同様、飲食店（喫茶店やレストランなど）が多いが（2015年現在6件）、そのほかにも写真スタジオ、児童遊戯施設、リサイクルショップ、団地集会所、葬儀場、公園の展望台などがある。

このような再利用の数の多さと彩りは、建物の所有者に加え近隣住民の愛着が背景にあると筆者は思う。軟石の蔵や倉庫が培ってきた風景への愛着、言い換えれば‘思い入れ’である。「観光資源」というコトバを、主に「観光客を受け入れる」意味合いとして捉えるならば、この地域の建物は必ずしも観光資源ではない。しかし、地域の宝物（光）を観るというコトバの本来の語義を内包した資源といえるだろう。

個別事例④ Tさん宅タマネギ倉庫（東区丘珠町）写真4

伏籠川のたもとでタマネギ生産を営むTさんの、現役の倉庫である。建てられたのは現在65歳のご当主が「3～4歳の頃」とのことなので、昭和20年代後半というところか。軟石は、チェーンソーによる機械掘り（4.「南部」の節に後述）が導入される前なので、ツルハシによる「ツルメ」（跡）が遺っている。妻壁に「○竹」と刻まれているのは、Tさんの頭文字を取った印で、このあたりの農家にはよく見られる。商家の印には記号化されたものや家紋を彫っているところもある。タマネギ農家でもそれは見られるが、中には頭文字をアルファベットで刻んでいるところもある。タマネギを海外に輸出した記憶でもある。印一つにも、持ち主の愛着が偲ばれる。この倉庫で、タマネギを入れる箱が木製で約40箱、スチール製で60箱、収蔵できるという。一つの箱にタマネギは50～60個入るので、2000～3,000個にはなる。Tさんによると、軟石の倉庫は「夏は涼しく、冬は暖かいので、タマネギを保管するのに適している」とのことである。



写真4：Tさん宅タマネギ倉庫



写真5：スタジオ・アン EAST

個別事例⑤ スタジオ・アン EAST（東区北28条東21丁目）写真5

交通の往来の多い札幌新道沿いにある。明治時代は「札幌村」と「丘珠村」の村界があったところである。1962（昭和37）年に建てられたMさんのタマネギ倉庫がある。妻壁には「○宮」という印が刻まれている。周辺が市街化された後、建物はクルマの販売店などに使われたが、2002年から写真スタジオになった。再利用に携わったKさんは「子どもたちの記念写真を撮るのにふさわしい建物」と直感したそうである。人生の節目に「大きな石の建物で写真を撮った」体験は、成長の後も記憶に遺ることだろう。

3. 南東部（白石区・厚別区・豊平区・清田区）

2007年に豊平区、2011年に白石区、2014年に清田区、厚別区を調べ、白石区10棟、厚別区4棟（北海道開拓の村の建物は除外）、豊平区36棟（うち7棟解体）、清田区7棟を確認した。4区全体の分布を図3に示す。

分布図を見ると、平岸街道や定山溪鉄道跡の近くに建物が集まっている。平岸街道は明治の早い時期に開けた古道であり、定山溪鉄道は軟石ともゆかりが深い鉄道である。これらの道や鉄路が、石山で産出された軟石の運送に大きな役割を果たしたことは想像に難くない。

豊平区36棟のうち21棟が「蔵・倉庫」で、その多くはリンゴ農家の収蔵庫（ムロ）である。定鉄と旧国鉄千歳線が交差する旧東札幌駅はかつての（今も？）流通基地で、建物の集積が見られる。国鉄白石駅や厚別駅の近くにも農協の石造倉庫があったが、筆者らが調査に着手する前に解体されている。

厚別区4棟中3棟はサイロである。市街化された住宅地にポツンと遺るサイロ、しかも石造のそれが遺る風景は、ある意味で札幌独特といえるかもしれない。‘サイロに牛舎’という牧歌的の景色といえは道東の根釧パイロットファームなどが思い浮かぶが、道東は今も広大な草地が広がる中での現役であり、しかもサイロは比較的新しいスチール製が多い。札幌近郊は酪農先進地だったゆえか、古い石造や煉瓦造のほうが目につく。それらが、役目を終えたあとも地域の歴史を語るモニュメントのように遺っている。稀少で、貴重な景観である。

個別事例⑥ Sさん宅納屋（白石区菊水上町3条1丁目）写真6

豊平川のほとりの菊水地区がかつて野菜や果物、酪農の産地だったことを伝える建物である。S宅には軟石の納屋とともに煉瓦造のサイロも遺っている。否、「遺している」というべきである。Sさんの家は明治の初期に入植し、タマネギやリンゴの栽培を手がけ、戦後は乳牛

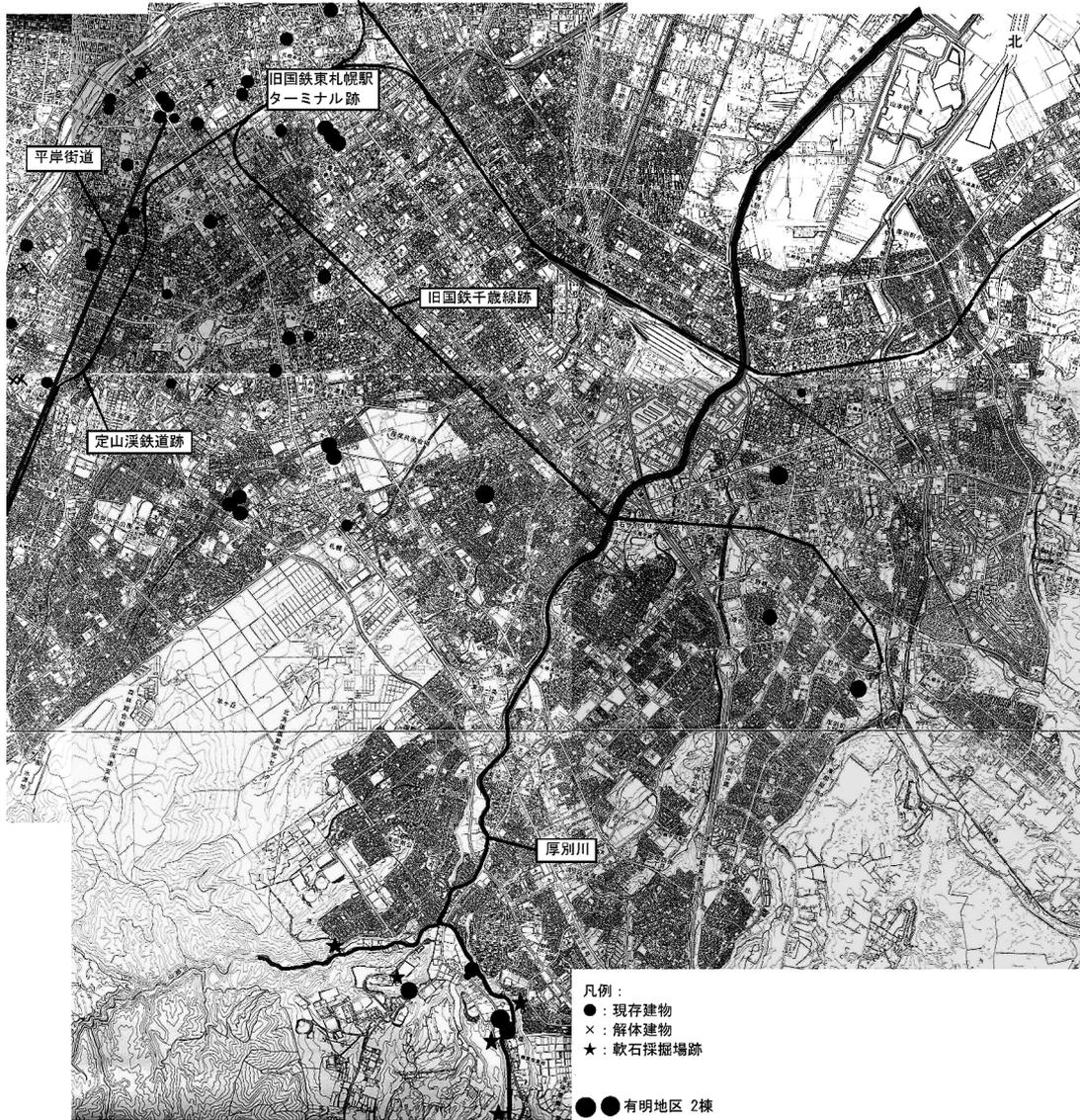


図3：軟石建物分布図 南東部（白石区・厚別区・豊平区・清田区）



写真6：Sさん宅納屋

も飼った^{注16)}。酪農は1960年代にやめたが、その後も煉瓦のサイロと軟石の納屋は余生を送っている。Sさんは

屋根のトタンを葺き替えるなどして建物が傷まないように努めており、私たちはそのおかげで土地の歴史を視覚的に実感することができる。

厚別川（清田区ではアシリベツ川という）の上流で、農家の納屋や穀物蔵などの建物が数棟見つかった。所有者への聞き取りなどによれば、この川沿い（有明、真栄など）で採掘された軟石を用いたものである。清田区有明で軟石を産出していたという史実は、郷土史の既出文献等でも散見されるのだが、実際の採掘場所まで言及したものは管見するところまだ見つからない^{注17)}。今回、建物の所有者・石材業者・元石工さんへの聞き取りと現地調査をとおして、流域の広範囲で採石していたことが新たに判った（採掘場跡とみられる箇所を分布図に★で示した）。厚別区で石材業を営んでいたIさんによると、「清田の周辺の建物などには有明産を使った」とのことであ

る。これまで、札幌市内の軟石建物はばくぜん「石山」産と捉えていたが、遅まきながらその認識を改めたい^{注18)}。筆者は、厚別川流域産の軟石を、札幌軟石の低位概念として「アシリベツ軟石」と仮に名づける。もしかしたら、厚別川下流の厚別区側の建物はアシリベツ軟石を用いている可能性もあるが、今のところその証拠は得られていない。

個別事例⑦ Uさん宅元リンゴ倉庫（清田区真栄）写真7

手前の1/3が煉瓦を積み、奥の2/3は軟石を積んでいるという、ユニークな倉庫である。建てたのは昭和20年代、現当主のUさんの祖父の代である。倉庫は半地下の、「ムロ」になっている。リンゴを越冬して凍結させずに保管するには半地下が適しているという。当初軟石だけで建てたのだが、収穫するリンゴの量が増えてきたので、1962（昭和37）年に煉瓦で建て増した。Uさんいわく、軟石は「裏のうちの山で掘った」と。Uさん宅は厚別川支流の西真栄川沿いにある。Uさんに限らず、他の農家でも軟石の産地を尋ねると「すぐその山で採れた」という例が聞かれた。裏山で木を伐って家の建材にするかのごとく、軟石はとても身近な存在だったようだ。煉瓦を建て増したのは、頼んだ職人のIさんが煉瓦を扱っていたからとのこと。Iさんというのは、前述した厚別区の石材業者である。そのIさんに伺うと、元々軟石も積んでいたのだが、煉瓦（江別産）も扱うようになったという。昭和20年代から30年代にかけてこの地域で組積造の素材が軟石から煉瓦に変遷したことを、Uさんの倉庫は物語っている^{注19)}。Uさん宅がリンゴを栽培していたのは昭和50年代までである。「もうリンゴは入れてないから、倉庫は壊してもいいんだけど…。でも、先祖が建てたものだからね」とUさんは語る。



写真7：Uさん宅元リンゴ倉庫

4. 南部（南区）

南部は南区一区で、2009年と2010年に調べ、2014～15年に補充した結果、102棟の軟石建物を確認した。うち、この間に8棟が解体されている。

‘札幌軟石のふるさと’だけあって、10区中で群を抜いて多い。全市域で確認した建物数（後述）の3割強に当たる。実は、筆者らが現地を歩くなどして見つけた数は132棟にのぼったのだが、これを102棟に絞ったのは「築50年」で線引きし、残りの30棟を「新築」として分別したからである。といっても、中央区の建物（RC造）で外壁に軟石を貼っているのはこの10～20年のものと見当がつくが、南区はもっと古そうである。いわゆる‘昭和’を感じさせるものが多い。さりとて「築50年」とまではいかない。いわばスペクトラム（明確な境界を引けない連続帯）である。そこでひとまず132棟を母数として、可能なものは所有者への聞き取りも交え、以下の二点を目安にして「築50年」の線引きを試みた。

目安の一つは、軟石の表面仕上げである。昭和30年代後半にチェーンソーによる機械掘りが導入されたので、その平滑な仕上げのものは築50年を下る可能性が高い。一方、いわゆるツルメや小叩き、鑿切りといった手彫りの仕上げは、昭和30年代前半以前、すなわち築50年以上と推認できる。

目安の二つ目は、建物全体の外観や部分的形状である。戦後北海道に建てられた建物は、特に住宅の場合、年代によって特徴が分かれる。屋根である。おおむね1960年代は三角屋根、70年代は変形屋根（片流れなど）、80年代以降は無落雪（陸屋根）が主流である²⁾。ある程度、これで察しがつく^{注20)}。

「部分的形状」というのは、例えば暖房用の煙突である。暖房も、年代によって特徴が現れる。筆者自身の記憶では、1980年代（昭和50年代）以降はいわゆるFF式が主流になってきた。つまり煙突がなく、FF式の排気口のみ建物には築50年未満とみられる。

上記の結果、導き出したのが102棟である。この分布を図4に示した。なお、参考までに「築50年未満」の建物30棟も図中○印で示した^{注21)}。

石山2条2丁目、3丁目（豊平川の支流である穴の川の下流域）にかなり密集している。この地区の石造建築（木骨なども含む）の密度は、全国的にみても有数の高さではなかろうか。他の凝灰岩系の石材と比べて、建築に適う特性があるのかもしれない。他の産地との違いも興味深いところである。

102棟の用途別内訳は次のとおりである。

「住宅」47棟、「蔵・倉庫」43棟、「店舗・事業所」6棟、「サイロ」4棟、「その他」（旧石山郵便局ほか）2

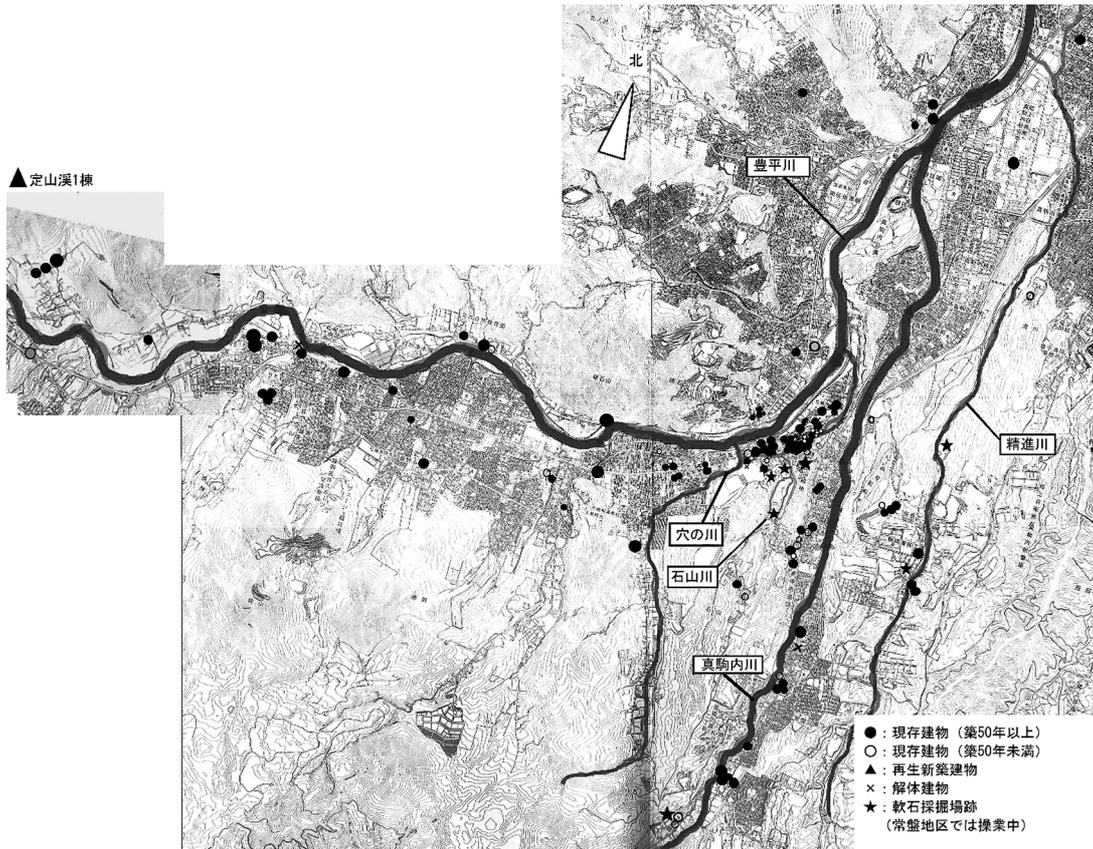


図4：軟石建物分布図 南部（南区）

棟。

住宅が非常に多く、4割強を占めている。石山2条2丁目、3丁目の軟石密集地域でも、住宅（及びそれに付随する物置や車庫）が目立つ。分布図には採掘場跡を★で示したが、前節で述べたように「裏山で掘った石で家を建てる」のが自然な成り行きだったのだろう。

住宅に石材がこれだけ使われているのは、札幌はもちろん全国的にみて稀少な地域といえるのではないか。

個別事例⑧ K果樹園元リンゴ倉庫（南区南37条西11丁目）写真8

南区の条丁目という町名は、札幌の中心部に近い市街地という印象を筆者は持つが、かつては果樹園が広がっていた。Kさんの家は、明治30年代にこの地でリンゴの作付けに成功し、広く栽培を手がけたという³⁾。ここに生まれ育った入植4代目のTさんによると、倉庫（ムロ）は昭和20年代の建築である。元はもっと大きなムロがあり、現在のものは2代目である。軟石の外壁表面の仕上げが平滑なので、機械掘りかもしれないと思って尋ねたところ、Tさんは「元々はゴツゴツした表面だったが、石工職人さんが表面を削ってしまったらしく、父はそれが不満でした」と語る。この話からすると、建築年代は手掘りの時代であろう。Tさんの父は、ツルメ（ツ



写真8：K果樹園元リンゴ倉庫

ルハシの跡)が残る仕上げのほうが石蔵らしいと感じていたのかもしれない。1944（昭和19）年生まれのTさんは、小学生の頃「イタズラをしたら、お仕置きでこのムロに入れる」とよく親に言われたそうである。「子ども心に、ムロは暗くて怖かった」と、懐かしむようにお話を聞かせてくれた。筆者らの軟石物件調査のことも、新聞報道などでご存じだった。



写真9：Tさん宅

個別事例⑨ Tさん宅（南区真駒内）写真9

真駒内といっても市街地ではなく調整区域で、一般には「駒岡」といわれる一帯である。この住宅はいわゆる「腰折れ屋根」を架けている。筆者が生まれ育った土地（愛知県及び東海地方）ではほとんど見かけたことのないフォルムである。一言でいえば、‘内地’の和風在来家屋にない、モダンとかハイカラである。この屋根が住宅に用いられた最も早い例の一つが、1913（大正2）年の「有島武郎旧邸」とされる⁴⁾。自らの欧米での生活体験を意匠に生かした有島の邸宅は、札幌でも耳目を集めたことであろう。駒岡のこの住宅外観にも、洋風の伝播を見る。

この住宅は、精進川沿いにある。ここを訪ねたきっかけは郷土史の文献等でこの川沿いでも軟石を採掘していたことを知ったからだ^{註22)}。くだんの住宅も、精進川産の可能性もある。この地区に戦後の入植以来お住まいの方に伺うと、ここでも採石は複数個所で行われていたという（図4参照）。筆者は前節の「アシリベツ軟石」同様、これを下位概念として仮に「精進川軟石」と名づけた。

5. 西部（西区・手稲区）

西部で確認できたのは、西区・手稲区の2区を合わせて8棟である（2012、13年調査）。手稲区の郊外に牧場の遺構が見られる。ここでは広々とした牧草地や牛舎とともにサイロが遺る。北区の「近藤牧場」となると、北海道的な原風景を伝えている。この地域には元々牧場が比較的多くあり、軟石の建物のサイロなども現存以上にあったのだが、調査以前に解体されている。ただ、その分を考慮しても絶対数が少ないことに違いはない。それがまた、地域の特徴ともいえる。分布を図5に示した。

数が少ない理由として真っ先に考えられるのは、軟石

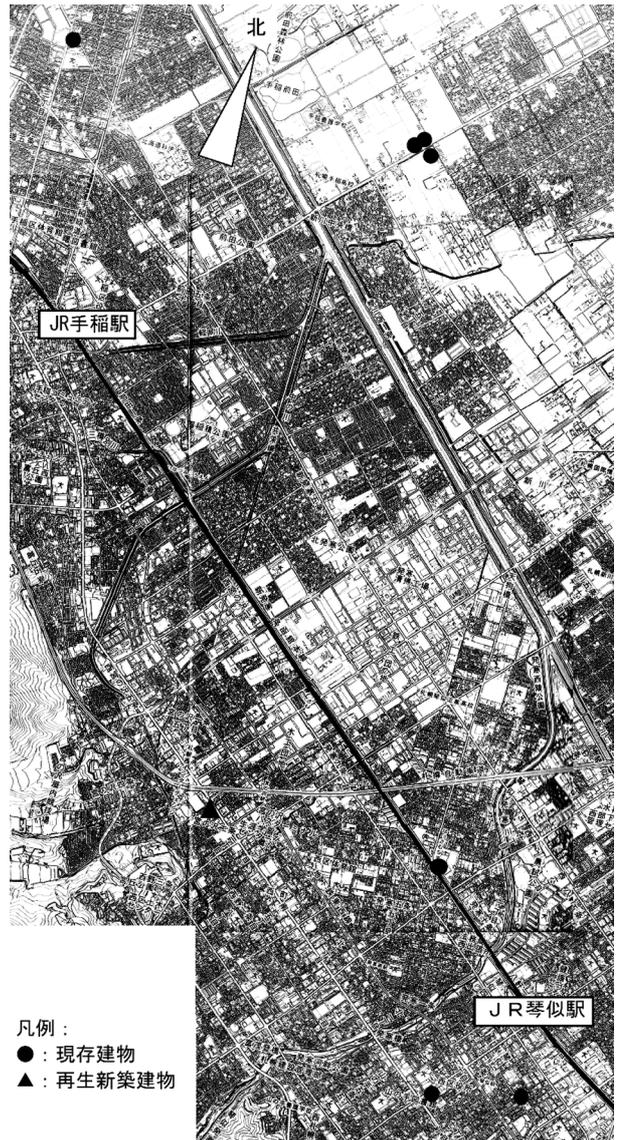


図5：軟石建物分布図 西部（西区・手稲区）

の産地から比較的遠方だったことだが、ここより遠方の小樽には札幌からも軟石が運ばれている⁵⁾。その数は相当数に及ぶと推測される。小樽より手前でも数が少ないのは、距離の問題だけではなく、中心部の商業・流通の集積、北部のタマネギ、南東部～南部のリングといった土地利用の特性上の違いも、窺われる。

数は少ないが、個性的な建物が見られる。

個別事例⑩ 小学校の旧奉安殿（西区琴似1条7丁目）写真10

小学校のかつての奉安殿だったという建物が遺っている。奉安殿は戦前の皇国史観教育のシンボルで、戦後は学校から撤去された。この建物も、学校とは別の場所にある。札幌市内では、筆者が知るの他に一箇所のみである（軟石ではない）。軍国主義に通底する史観を肯定

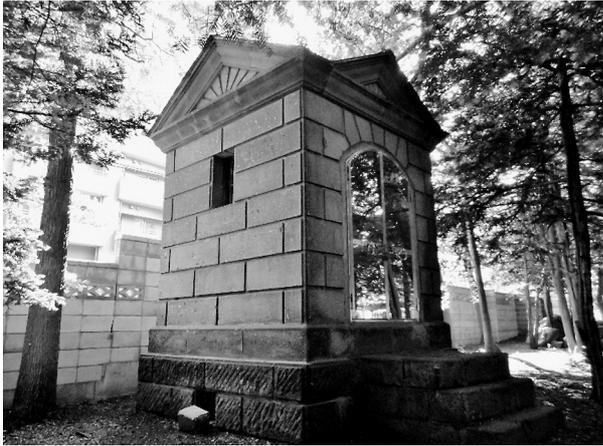


写真10：元奉安殿



写真12：薬品卸会社倉庫



写真11：あんとりぼ一館

的に受け継ぐわけにはいかないが、建物自体は歴史の証として遺していく意義がある。

個別事例⑩ あんとるぼ一館（西区宮の沢2条2丁目）写真11

「白い恋人パーク」に、明治期築の醸造場の建物が再生新築されている。元の場所（中央区）にあった当時、フレンチレストランとして再利用されていて、札幌における歴史的建物再利用の先駆けの一つだった。1980年代のバブル期、いわゆる‘地上げ’により解体されることとなったが、常連客らが中心となって建物の保存を訴え、その甲斐あって移築されることになった^{注23)}。地域の文化遺産の保存を市民が能動的にはたらきかけたこと（それがもはや歴史になりつつある）のモニュメントでもある。

個別事例⑪ 薬品卸会社倉庫（西区発寒10条3丁目）写真12

JR 発寒中央駅の近くに遺る倉庫の主たる石材は、質感や色合いからして札幌軟石以外の凝灰岩とみられる。

札幌軟石以外の凝灰岩が建物に使われるのは、札幌では珍しい。筆者らが知る限り、この一棟のみで、「小樽系軟石」^{注24)}とみられる。小樽には札幌軟石が鉄道により運ばれ、運河沿いの倉庫群などに使われたのだが、この倉庫は立地条件からすると逆に小樽から運ばれた可能性がある。

6. 総括

全市域で2005年から2015年までの間に合計317棟の建物を確認した。うち38棟はその間に解体され、消失している。一方で、再生新築されたものが5棟ある。元の用途の内訳は次のとおりである。

「蔵・倉庫」202棟、「住宅」55棟、「店舗・事業所」29棟、「サイロ」20棟、「その他」11棟。

業種別の内訳は次のとおりである。

「農業」92棟、「個人」89棟、「商業」44棟、「流通業」19棟、「製造業」16棟、「宗教」12棟、「公共」9棟、「学校」8棟、「不明」28棟。

「蔵・倉庫」が2／3弱を占めているのは歴史的経緯からして当然ではあろうが^{注25)}、他の用途も含め業種との組み合わせを見ると、五つの地域でそれぞれに特徴が見て取れる。特に「蔵・倉庫」は、物的資産の集積を表現しており、「何を収蔵・保管したか」を知ることにより、その地域が歩んできた歴史を知ることができる。「築50年以上の札幌軟石建物」は、札幌の地誌の一面を浮き彫りにするメルクマールである。

317棟のうち48棟が再利用されている（15.1%）。解体された38棟を除く279棟のうちでは45棟である（16.1%）。48棟のうち、飲食関係が17件ある。このほかに、何らかの形で市民が利用できる場所（集客やコミュニティ機能を持ったもの）が19件ある。昨今、‘古民家再生’が人口に膾炙しているが、札幌における建物の再利用もかなり根づいてきたと筆者は思う。理由は次のとおりであ

る。

筆者らはかつて、再利用の建物を採集し、2000年と2003年にガイドブックとして刊行した。その冊子で紹介したのは軟石に限らず煉瓦造や木造も含め、2000年には76件だった。それが2003年には93件に増えた⁶⁾。そのころすでにブームの感があった。このうち軟石の建物に限ると、前述の飲食関係や「何らかの形で市民が利用できる」ところに該当するものが2000年時には24件、2003年時に22件だった。今回の調査では36件（飲食17件＋その他19件）である。うち3件は建物が解体されているが、それでもなお、この10年余で数は増えている。否、増えたというよりは筆者らはいわば‘再発見’したにすぎない。かねて識者が指摘・提案してきたとおり、札幌のような積雪寒冷地の場合、建築年代の早い木造の家屋は断熱技術を講じておらず、そのまま住み続けたり、再利用するのは困難を伴う。その意味で、断熱性の比較的高い軟石や煉瓦の建物は、北国になじむ再利用である⁷⁾。再利用という媒体を経て、建物所有者・使用者から近隣住民、建物を訪れる市民、ひいては観光者へと愛着や思い入れが深まり、逆に所有者らへフィードバックされることであろう。

Ⅳ. おわりに

2012年に刊行された書物で、札幌軟石に言及した著述を筆者は目にした。その著述は、「北海道開拓のまちづくりに特徴的なのは、軟石を用いた石造建築物の多さであ⁸⁾り、「札幌や小樽、函館などの石造、レンガ造の建物は再生され、観光資源として大きな役割を果たしている⁹⁾とし、次の一文で締め括られている。

「札幌の人にとって、石造の建築物は他の都市にも沢山あると考えるかもしれないが、札幌や小樽のように多くの石造建築物を建て、残しているところは全国的にみて極めて珍しいことである。『石材に恵まれた札幌の独特の建築風景である』ことを十分に認識して、石造り建築物、特に生活の中に密着して存在してきた札幌軟石の建築文化をもっと札幌の内外に向かって発信しても良いのではと考える¹⁰⁾。

筆者はこの文を拝読して、「札幌の人」の一人として思った。私たちは今もってまだ「認識」が不足しているのか、と。筆者は1991年から活動を始め、軟石に限っても2005年からこだわってきたが、この著者に言わせると、まだまだ私たちの「発信」は足りないらしい。鞭で打たれた気分になった。反面で、次のようにも思った。この著述は既出文献の切り取りと焼き直し（出典を明示した上ではあるが）、二次情報の寄せ集めではないか。これまでの識者の古くからの知見を、引用で繋いでいる

だけではないか。一例を挙げれば、「全国的にみて極めて珍しい」ことを、この著者は自身で現在においてどのように考証したのか。これらの反問が、本稿執筆の動機の一つとなった。

この著者は「札幌軟石の建築物の多くが名もない建物であったが、札幌の街を歩くと思いもかけないところに石造りの建物を見る¹¹⁾ともいう。しかし、建物の多くに「名」がなかったわけではない。「名」は（名称とか知名度にとどまらず）、あった。この学識者が知らないだけなのだ。札幌軟石についての「認識」と「発信」はもはや、かかる学識者に言われるまでもない¹²⁾。市民はすでにそれを実践してきた。

とまれ、Ⅲ. で述べた建物の調査結果から、札幌軟石が地域性と歴史性を豊かに内包する資源であることの一端を再確認できた。筆者らが10年来続けてきた「軟石発掘大作戦」で軟石物件を探し出すという実践をとおして送受信してきたのも、その歴史性と地域性である。それは、「札幌の」独特の建築風景というような全市一括りではなく、その中でも地域ごとに特有な風景である。

札幌軟石は、数が多いとか「全国的にみて極めて珍しい」からだけではなく、各々の地域（極言すれば個々の建物）の歴史を物語る資源として再評価すべきであろう。Ⅰ. で述べた「地域資源としての札幌軟石」に関わる‘こんにち的’な考証の結論は、ひとまずこの一点にある。

Ⅱ. で述べたとおり、建物以外の工作物について本稿では考察の対象外とした。しかし、近年の新たな利用も含め、工作物も注目すべき要素であることはいまでもない¹³⁾。また、考察の対象とした建物についても、市域で確認された317棟というのはあくまでも筆者らが調べた限りである。筆者らの知らないところで、まだ存在している可能性はある。さらに、札幌軟石は道内各地に運ばれている。本稿では視野の外だが、市外での分布から読み取るべきこともあるだろう。

Ⅲ. 3. 4. の個別事例で述べたように、厚別川や精進川など豊平川の複数の支流、言い換えれば支筋溶結凝灰岩が露頭する多くの川の、多くの場所で軟石が採掘されていたことが判った¹⁴⁾。札幌軟石＝南区石山（穴の沢）産という理解を再検討する必要がある。

これらの考察は、次なる宿題として筆者自らへ課しておきたい。

注

¹¹⁾ 「中小企業による地域産業資源を活用した事業活動の促進に関する法律」第2条第2項による「地域産業資源」の定義をもとに、生活的な要素を加味して、やや広く解釈した。

- 注2) 池上重康他：札幌の石造建築に関する史的考察，日本建築学会北海道支部報告集No64（1991）で，昭和戦前期の札幌市域の「現存する石造建築」を101棟，瀬野徹他：札幌における石造・煉瓦造倉庫の再利用実態，日本建築学会北海道支部研究報告集No79（2006）では，中央区，北区，東区，豊平区の4区を中心に「現存する石造・煉瓦造倉庫」で97棟という数を出している。また，足達富士夫・越野武他：札幌市歴史的建造物実態調査，札幌市（1992）では，「札幌の市街地のほぼ全域」で石造建築が1982年に90棟あり，それが1992年に67棟に減ったことを報告している。
- 注3) 「わが街の文化遺産の再発見」をテーマに，1991年から活動を続ける市民グループ。建物や街並み，地域の歴史などに目を向け，さまざまな行事を繰り広げている。
- 注4) 2002年の藻南公園（南区）「札幌軟石ひろば」づくりのワークショップに参加した市民を中心に作られた市民グループ。軟石に関わる活動を展開している。その活動が基になって，「札幌軟石まつり」が催されるようになった。
- 注5) 札幌市地域計画課：歴史を活かした景観まちづくりガイド p. 9 及び NPO 法人歴史的な地域資産研究機構：れきけん活用ガイド p.11（2015）を参照
- 注6) 建築大辞典，彰国社（1991）によれば，「蔵」は第一義に「物品を保管貯蔵するために造られた建物の総称」である。また，「倉庫」は「原料・材料・製品を一時的あるいは長期間保管，貯蔵するための室または建物」とある。さして意味に違いはなさそうだが，本稿では和風在来的な外観を持つものを「蔵」とし，そうでないものを「倉庫」としつつ，統計的には一括した。後者には牛舎などの家畜小屋，物置，車庫，半地下構造的な「ムロ」を含めた。
- 注7) 「サイロ」は，円筒形のそれを指す。乳牛などの飼料を保管し発酵させるものなので，広義では倉庫に含まれるかもしれないが，特有の形状ゆえに一分類とする。
- 注8) 貸金業の「質屋」を含めた。
- 注9) 食品加工業，醸造業，石材業を含めた。
- 注10) 広義では商業に含められるが，生産農家と消費者の間に立つ仲買業者の倉庫の存在が札幌では大きいので，分類化した。
- 注11) 川端伸幸氏への聞き取りによる。
- 注12) 勇崎恒也氏への聞き取りによる。
- 注13) 高木圭助氏，岩波凡人氏からのご教示による。
- 注14) 注13) に同じ。ほか，山田定市：協同組合と街づくり，「新札幌市史」機関誌 札幌の歴史，第37号，pp.30-39（1999）を参照
- 注15) 桑園駅前にも倉庫が一部残っているが，軟石ではない。南区簾舞はかつて定山溪鉄道の駅があり，元農協倉庫が今も2棟遺るが，鉄道が廃止されて久しい。
- 注16) 佐々木恵美氏への聞き取りによる。
- 注17) 札幌市教育委員会編：さっぽろ文庫23札幌の建物，p.120（1982），同：さっぽろ文庫45札幌の碑 p.156，（1988），札幌市豊平区総務課他編：とよひら物語 古老をたずねて p.21（1992）に関連の記述がある。ほか，札幌市公文書館所蔵に「有明産“札幌軟石”」と題した資料がある。出典は「くみあいだより」103号抜粋とあるのみで，定かではない。おそらく農協の機関紙かと推測される。
- 注18) 明治期の地形図を見ると，現在の有明のあたりにも「石山」という地名が記されている。採石する山を「石山」と呼ぶのはよくあることだろう。なお，現在唯一産出されている南区常盤（T 石材工業）は真駒内川流域だが，この流域でも以前は複数の箇所産出されていたと聞く。
- 注19) 岩見沢市には，1階石造，2階煉瓦造という蔵がある。石材は札幌軟石とされる。岩見沢の組積造建築は，まず軟石が使われ，後に煉瓦が多くなったと聞く。
- 注20) ただし，当初三角屋根で建てたものを後に無落雪に改造するという例も当然あるから，現状有姿が無落雪だからただちに新しい，とも言い切れない。
- 注21) 築50年未満であっても，「将来資産」としての価値があるものもある。前掲注5）れきけん活用ガイド p.9を参照
- 注22) 澄川開基百年記念事業実行委員会：郷土誌すみかわ，pp.90-93（1981）年によれば，採石されていたとされるのは「南区澄川389番地」である。真駒内（駒岡）の複数の住民の話では，それより上流の真駒内側でも採石されていた。
- 注23) 内部はレストランとして再利用当時改変され，外観は移築後さらに改変されており，復元とは言い難い。
- 注24) 小樽市総合博物館大鐘卓哉学芸員によれば，小樽で採掘された軟石にはさまざまな種類がある。地質学的にみても，生成の年代に地球史的な開きがあり，採石の場所も異なるため，現時点で「小樽軟石」と単一的に呼称するのは適当ではなく，「小樽系」とすべきとしている。ただし，詳細な解明は今後に待たれる（2014年11月16日「軟石未来プロジェクト」セミナーでの報告）。
- 注25) 前掲注2）池上によれば，「昭和25年の建築基準法の

制定にともない、組積造は厳しい法的規制を受け、さらに昭和30年代以降CB造の普及とともに、石造建築は衰退していった」(CBは、コンクリートブロック)。

^{注26)} こんにち的に「認識」すべきは、所有者や市民による建物再利用や住み続けることを支援する専門的・技術的マンパワーの拡充など、具体的課題であろう。

^{注27)} 近年、札幌市内で有形文化財登録された住宅2件には、その対象として建物とともに軟石の塀も含まれている。

^{注28)} 豊平川の支流のみならず、島松川流域(北広島市)でもかつて軟石が掘られ、地元では「島松軟石」と呼ばれた。これも広義には札幌軟石と解しうる。

るご尽力をいただきました。以下に記して心から敬意を表します(敬称略・五十音順)。

池上美佐子 近藤りえ 張慶在 菅原純子 中川阿梨紗 中村祐子 長屋純子 山口あかね 吉村美智恵 米田麻理子

なお、本研究は北翔大学北方圏学術情報センターより「地域研究」の一環として認められ、その結果ここに寄稿するものです。

引用文献

- 1) 札幌村歴史研究会：北のたまねぎー札幌黄を育てた人たちー，p.22,北海道出版企画センター(1998)
- 2) 足達富士夫：北の住まいと町並，pp.81-87,北海道大学図書刊行会(1990)
- 3) 藻岩下連合町内会郷土誌編集特別委員会編：郷土誌藻岩下，pp.88-92,札幌市南区(2003)
- 4) 越野武：有島武郎旧邸，札幌芸術の森有島武郎旧邸(リーフレット)(2014)
- 5) 越野武：北海道における初期洋風建築の研究，pp.288-290,北海道大学図書刊行会(1993)
- 6) 札幌建築鑑賞会編：さっぽろ再生建物案内，第2版，p.95(2003)
- 7) 足達：前掲書，pp.188-190
- 8) 光武幸：大学的北海道ガイドーこだわりの歩き方，札幌の近代洋風建築物は道外にはない個性派，p.74,昭和堂(2012)
- 9) 光武：前掲書，p.74
- 10) 光武：前掲書，pp.76-77
- 11) 光武：前掲書，p.76

写真

6, 11: 菅原純子(それ以外は筆者)

謝辞

本稿に当たり、札幌軟石に関する地質学的な知見を土屋篁氏から、軟石採掘の歴史に関する知見を「札幌軟石文化を語る会」岩本好正・佐藤俊義・小原恵の各氏から、それぞれご教示いただきました。深く感謝申し上げます。また、軟石建物の調査結果は、札幌建築鑑賞会の有志会員ほか市民が現地を歩き、その眼で確かめた共同のたまものです。特に同会スタッフの皆さんには格別な